

親が歌えば、子どもは笛吹く

——十七世紀オランダ絵画が語る子どもものしつけ——

小林 頼子

オランダに、ヤン・ステーン風の家事の切り盛り、
という言いまわしがある。お片付けやしつけなんか何
のその、大人は飲んで笑ってドンちゃん騒ぎ、子ども
は心ゆくまでいたずら三昧。こんなふうでいいのかし
ら、と思わず心配になってしまうほどちらかった部屋
の中。ヤン・ステーン（一六二六—一六七九）は、そ
んな家庭の情景を繰り返し描いて、避けるべきインモ

ラルのお手本となった十七世紀オランダ画家である。
ハーグのマウリッツハイスマ術館が所蔵する《親が
歌えば、子どもは笛吹く》（図1）は、山ほど伝わる
その種の「ヤン・ステーン風の家事の切り盛り」図の
なかでも、きわめつきの一品といっていいたいだろう。ま
ずは、小ぶりの風俗画が多いなかにあつて、一三四×
一六三センチメートルという堂々たる大きさを誇つて

いるから。その上、作品の質が圧倒的に高いから。そして、何よりも、そこに当時の家庭内での教育観が如実に反映しているからである。

十七世紀当時、オランダでは教育をめぐり熱い議論が交わされていた。親から譲りうけた本性は決して変わらないとする陣営と、教育を通じて人間形成は可能ならずだと信じる陣営。前者は、親の本性の罪深さ、愚かさはそのまま子どもに伝わっていく、だから、子どもは強制的に、頭ごなしにしつけるしかないのだと主張する。後者は、子どもの心は何も書かれていない白い紙のようなもの、だから、教育によっていかんとも書き込む（育て上げる）ことができはずだと考える。²⁾「親が歌えば、子どもは笛吹く」は、その二つの議論のちょうどまんなかへんにある諺で、ステーンはその微妙な、どっちつかずのなりゆきを絵画化しているのである。親の歌は子の笛の演奏の見本となるが、その際、親の悪い筋が伝わらないよう厳しいしつけで

矯正を試みるべきなのか、それとも、教育の効果の大きな可能性に賭けるべきなのか。ステーンの絵は、ユーモアを込めつつ、一筋縄ではいかぬその問いを見る者に投げかけているように思える。

まずは、作品をじっくり見てみることにしよう。部屋の一隅の、タペストリーの掛かったテーブルに、ブドウとレモンと牡蠣を盛った皿が置かれている。その周りを中流ぐらいの三世代の大人と子どもが囲う。キャップをかぶり、窓に背を向けて座り、この情景を満足げに見つめる人のよさそうな老人はおじいちゃん。その斜め向かい側には、頭巾をかぶり、鼻眼鏡を掛け、右手に紙を持ち、左手でその一部をなぞるおばあちゃん。紙には作品タイトルとほぼ同じ内容の「歌／歌ったとおりに笛を吹く。昔からそうだった。一年たっても百年たっても、私が歌い、みながついてくる」というテキストが書かれている。二人の老人の間

に正面向きで座り、赤子を胸に抱き、おばあちゃんの持つ紙を覗き込む若い女はお母さん。彼女はおばあちゃんと声をあわせ、一緒に歌おうとしているようだ。老女の向こうの、山高帽をかむつた上機嫌の中年男はお父さん。右を向き、向かいの幼い息子に、なんと、戯れにパイプを吹かせている。右端後ろにはやや年長の少年が立ち、バグパイプを吹く。「笛を吹く」と「パイプをふかす」、「バグパイプを吹く」はオランダ語では同一の言葉 *blazen* になるから、まさしくおばあちゃんの紙に書いてあるとおり、子どもたちは歌にあわせて「パイプ」の三重奏をしていることになる。二人の「パイプ」を吹く少年の間には、やや幼い子どもが顔をのぞかせる。この子もやがておばあちゃんの歌にあわせて「パイプ」をふかし始めるのだろうか。いかにも楽しそうな三世代家族の団欒の情景なのだが、なにやら放縦な雰囲気も漂っている。画面左手前を陣取っている若い女のせいだ。差し出した左手にワ

イン・グラスを持ち、だらしなく座る彼女の頬は赤い。どうやらしたたか酒をきこしめし、すでにご機嫌の様子だ。お父さんの後ろには、肩にナプキンを掛けた若い男が立ち、右手を高くかざし、これみよがしにワイン差しから女のグラスへと赤い液体を流しいれる。同じ緑の服をつけ、無理な姿勢ながらも腕を伸ばしあうこの若い二人は、先に挙げた三世代の人々とは明らかに異質である。画面の左右に分かれた構図上の位置を考えれば、家族の一員というよりは、三世代の人物たちのまとめ役、この情景への注解役として描き入れられたと考えられる。場面の周縁部分に配されたモティーフ——左手前の床の上に甕、窓辺の液体の入った瓶とグラス、止まり木に休らう赤いオウム、壁に掛けられた籠とそのなかの二羽の鳥、そして前景や右寄りに立つ犬——も、おそらくは同じように注解の役割を担わされているように思える。

では、その注解とはどのようなものか。ステーンは



1 ヤン・ステーン《親が歌えば、子どもは笛吹く》、1663-65頃、ハーグ、マウリッツハイス美術館



2 クリスペイン・デ・パス
《節制》、1600、銅版画



3 ヤン・ステーン《十二夜》、1668、カッセル、国立美術館

この賑やかな情景を通じて、一体、上に簡単に触れた二つの教育論議のどちらの肩をもとうとしているのか。

当時、オランダで最も大きな影響力を及ぼしていたモラリストの一人にヤーコブ・カッツなる人物がいる。多くの著作を物したが、ここでは『古今鑑』という著書に注目しよう。そこで、諺「親が歌えば、子どもは笛吹く」に触れ、次いで「猫は生まれつきネズミ捕り」、「親ヤギが牧場でじゃれあえば、子ヤギもまねする」、「青い鳩の子は青」といった言いまわしに言及しているからである。それぞれの動物には、それぞれの動物に固有の性質が親から子へとうけ継がれていく、それは自然の理であり、おいそれと変わるものではない、人として同じこと、という含みはその記述からは垣間見える。カッツが、人の振る舞いは本性により決定されていると考える陣営にくみしているのは明らかである³⁾。

そんなことを考えてステーン作品を見直してみると、動物の姿がずいぶんと目立つことに気づく。オウム、二羽の鳥、そして犬。誰に強制されるでもなく、オウム、二羽の鳥、犬は、それぞれ人の言葉を繰り返し、籠のなかで同じ声で鳴き合い、人に従順につき従う。まさにカッツが引き合いに出している言い回しそのものではないか。人として例外でないとすれば、パイプを少年に吹かせるお父さんの呆れた振る舞いは、やがて、そのまま息子のなぞるところとなる。かくして三世代の人々は、ワイン・グラスを掲げる左手前の女性の思うがままに、いやおうなく愚行に走り出す。胸元のひもを緩めた彼女が脚を載せる行火は、風俗画にしばしば登場する性的な欲望の徴にほかならない⁴⁾。彼女は生まれもった愚かさ・欲望・放縦を制御することなく体現する者として、三世代の家族の情景に君臨し、彼らを本性のおもむくままに振る舞わせるのである。

だが、一方で、かの酔った女にワインを注ぐ男は見る者に別のことを訴えているようにも見える。器から器へ液体を注ぐのは、よく知られた節制のしぐさだからである(図2⁵⁾)。本来は、水でワインを薄める、という動作になるところだが、ここでは、伝統的なイメージからちよつとはみ出して、ワインをグラスに注ぎ、左手前の床の上の水差しで水をほめかすことにしたようだ。画家は、画像の伝統の力に想像力を左右されるが、一方で、いつだって表現の自由をもっているのだ。机上の皮を剥かれたレモンも、おそらく、偶然そこにあるわけではなく、節制の意味合いをもう一度、グメ押ししているのであろう。レモンは、ワインに入れ、アルコールの強さをやわらげる果物として用いられていたからだ。節制という美德をほめかすレモン。静物画でレモンとワインの組み合わせを見たなら、要注意である。

ちなみに、したたかに酔って羽目を外す女は、ス

テイン作品におなじみのモティーフの一つだが、彼女が節制のモティーフを伴って登場するのはごくまれである。だから、たいていの場面は放縦の思うままとなり、無秩序の巢となっている。たとえば一月六日の、救世主ご公現を祝う《十二夜》(図3)。画面中央に身を伸べて座り、ワインの入った壺をみずから右手に持ち、手酌でワインを存分に味わう女は、新年のお祝いもかねた十二夜をお祭り騒ぎに変えてしまっている。

しかも彼女の連れは、このたびは、ガラガラ太鼓を鳴らす「愚者」である。お祝いの席はいやでも乱れざるを得ない。彼女の後ろで机の上に立つ子どもも、だから、ワインを飲んでしまうことになる。よく見れば、彼にワインを飲ませているのは、なんと、修道女である。実は、紙の王冠をかむったこの少年は、十二夜の主人公に選ばれた「王様」なのだが、親たちは彼の行状にまったく注意を払っていない。ほうっておかれた子どもは、まんまと放縦の女の罠にはまってしまっ

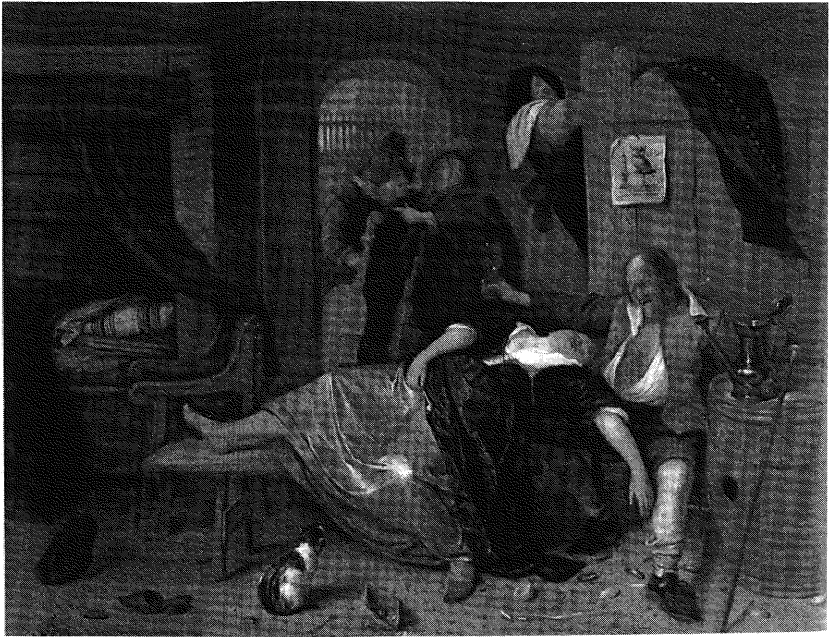
いる。

《親が歌えば、子どもは笛吹く》(図1)に戻ろう。

ワインを注ぐ若い男の動作、机上のレモンは、画面の中央にあつて、すべてのモチーフを統合する位置にある。放縦は、節制の力に抑制され、場面を支配するには至らない。つまり、節制というよき手本にならえば、善なる振る舞いへと目が開かれ、周囲に配された人々も放縦を寄せつけなくなるのである。よく見れば、画面中央に陣取る若いおかあさんは、放縦な女とはいかにも対照的に、子どもをやさしく胸に抱き、よき母の手本となつてほほえんでいるではないか。そうとなれば、オウムや犬も、必ずしもただのオウムがえし、本性へのひたすらなる隷属を示す消極的な負のモチーフではなくなる。むしろ、提示されたよき例を模倣し、学習していく能力の高さを示唆するものと解することにもなる。絵画では一つのモチーフが多義的に作用するのは決して珍しいことではない。ときに

は、この情景のように、正反対の意味を担って登場することすらある。だとすれば、「親が歌えば、子どもは笛吹く」という諺は、この作品において、教育の無力をほのめかすとともに、親の正しい教えにより、子を望ましい方向へ導くことができるという、肯定的な内容をもあわせもつことになろう。

おそらくステーンは、相矛盾する当時の教育論議の双方を《親が歌えば、子どもは笛吹く》(図1)という一つの作品のなかに同居させようとしたのだ。悪ふざけの過ぎた情景を面白おかしく描き出し、しようがないと諦めの笑いを誘い、一方で、どこか思い当たる節のある振る舞いから教訓を学びとらせ、よき方向へと目覚めさせる。楽しみと教訓。それは十七世紀オランダ絵画が担っていた重要な役割の一つにほかならない。⁶⁾《親が歌えば、子どもは笛吹く》を含め、ヤン・ステーン風の家事の切り盛りには、両義的なメッセー



4 ヤン・ステーン《見ようとしなければ、蠟燭も眼鏡も役立たず》、1668-72、アムステルダム、国立美術館



5 ヤン・ステーン《シンタ・クラス》、1665-1668頃、アムステルダム、国立美術館

ジが込められていることが多い。にぎやかに刹那の楽しみにふける人々の傍らには、賢明のシンボルであるフクロウの絵や(図4)、死のシンボルである髑髏がそつと置かれていたりする。見る者はそんな光景を楽しみながら、目を見開いて、みずからの日常の暮らしやその行く末を顧みる。子どものしつげとて例外ではなかったであろう。

「親が歌えば、子どもは笛吹く」のほかにも、ステーションには、家庭でのしつげの様子を描いた作品がある。オランダの子どもがいまもってクリスマスより心待ちにするシンタ・クラス(聖ニコラウス)のお祝いを主題にした作品群は、なかでも、私の好みの一品である。そのお祝いの日(十二月六日)に、子どもたちは暖炉の傍らに靴を置き、シンタ・クラスからの贈り物が、翌朝、靴の中に見つかるだろうことを期待して眠りにつく。良い子には望みどおりの贈り物が届

くが、いけない子には軽いムチのお仕置きが待っている。

図5でも、両手を差し出す前景の母親の前には、首尾よくシンタ・クラスからお人形とバケツいっぱいキャンディーを手に入れた上機嫌の少女がいる。母親の傍らでは、ゴルフ(ゴルフの前身の遊戯)のステイックをもらった少年が満面の笑みをたたえている。ところが、彼の右手の先では、年上の兄がベソをかいている。どうやら、背後の少女が左手に持つこの兄の靴には、贈り物ではなくムチ(見えにくいのが、靴に差し込まれた小枝)が入っていたようだ。小さすぎる洋服に入りきらない彼の体。身体と精神の成長のアンバランスが示唆されていて、なかなか面白い細部である。この一年、いたずらが過ぎた彼は、お尻たたきの、軽いお仕置きを受けたばかりなのだろう。でも、その彼にも、どうやらサプライズがあるらしい。画面後方のベッドのところにおばあちゃんがいて、右

手で彼に合図を送っているからだ。叱って、泣かせて、反省させて、でも、最後には、お前にもプレゼントがあるよ、と言ってご機嫌を直させる。鉛とムチを使つてのしつけをまさに地でいく情景である。

親が歌えば、子どもは笛吹く。わが身を振り返つても、生まれもつた本性はそうたやすく変わるものではない。しかし、それでも、親の振る舞いとしつけや教育は子どもに何らかの影響を及ぼすことだろう。それが吉と出るか、凶と出るか。《親が歌えば、子どもは笛吹く》(図1)でもそうだが、子どもに悪ふざけする大人の顔にステーンはしばしば自分の顔を重ね合わせている。その自虐的なユーモアの背後に、反面教師になりかねぬ親のありようが垣間見える。諺の含蓄はまことに深い。しかし、ステーンの絵画世界はさらに深い洞察に満ちているように思える。

(目白大学)

註

- (1) Jan Steen. *Painter and Storyteller* (exh. cat. ed. by H. Perry Chapman et al.), National Gallery of Art, Washington, 1996-97, p. 234
- (2) *Mirror of Everyday Life. Genreprints in the Netherlands 1550-1700* (exh. cat. ed. by E. de Jongh et al.), Rijksmuseum, Amsterdam, 1997, p. 254
- (3) Jacob Cats, *Spiegel van den ouden ende nieuwen tijd*, The Hague, 1632, pp. 66-67
- (4) Roemer Visscher, *Sinnepoppen*, Amsterdam, 1614 (no. 56を参照されたい。フェルメールの《牛乳を注ぐ女》の画面右下の行火を同じ意味に解する研究者もいる。)
- (5) *Portretten van echt en trouw* (exh. cat. ed. by E. de Jongh), Frans Hals Museum, Haarlem, 1987, p. 292
- (6) *Tot Lering en Vermaak* (exh. cat. ed. by E. de Jongh), Rijksmuseum, Amsterdam, 1976 (エナイ・デ・ヨング『ランダ絵画のイコノロジー』小林頼子監訳・NHK出版、二〇〇五年 八三—一〇四頁)を参照されたい。